リカ帝国主義」の挑発に責任

鮮戦争」の"米韓軍の侵入"

という仮説に頼って、「アメ

るのが当然なのだが、とかく 上、事実性の機関なほうを採

とで味方の社会的信用を高め

のではなく、事実に即するこ

神田文人は味ガを裏切った

らせてほしい」と注文がく 乗っているところの写真を撤 刊誌や雑誌から、「ヨットに

状況下における文学――なぜ われわれは書くのか」と決ま

会議のメインテーマは「核

私や三好徹常務も舌を巻くほ

しく考えなかったのだが、英

困な私も知日外人などの意見

訳の場合、situationという

味方を裏切るまいという配慮

たのである。

(東西南北)

る。多忙が一番先に駆逐する 年、
放置したままになってい が、それすらも」の二、三 ザーに乗り代えていたのだ る。十年近く前から、クルー

のは趣味の部分である。

いた。また第八 きばえを示して などは見事なで

るを得ない。これを受け入れ

っては、できそうでできにく

事実に合致するという見解が 出てきたのはいいことだ。

たがらない人びとは、おおか

たー・F・ストーン『秘史朝

認定にもとづくものである以

い沙断である。歴史が事実の

を転化していたのである。と から、共産圏に不利なことは

出している。そういう意味で田

中元首相はまさしく大衆である

し思うのです」と挑発する。

の大会を東京で開く。その進

米年五月には国際ペンクラブ 特に去年から忙しくなった。 ような政策を政治の領域で打ち

ご受けてから数年になるが、

日本ペンクラブの常務を引

行動に基本的には合致する

디그

雄

間『田中角栄の大反撃』(光

俯で大**強になっている。**川端

第三世界の会員にとっては、

今日われわれが直面している

一十七年目になるわけで、五

右の西部の論説は、実は小筌

じあっているのだが、私にとっ 論容を迎えて、重要な課題を論 てもっとも興味深かったのは、 パ市民社会論的な発想も、一九 三〇年代のエリート主導の「大 位や集団で「積極的に意思決定 ではないとの前提で、様々な単 衆」批判の発想も、もはや有効 での大衆概念」つまりヨーロッ

> てゆけず、さすがの伊東もタジ 新な発想に中岡は面喰ってつい

つながるのであるが、西部の断 文社、一九八三年)の論点にも

タジの感がある。

迫られているとき、当の日本 の現状打破的な役割の再換討が からも、国際社会における日本

米欧はもとより、アジア諸国

東京新聞。1983.06.30

ト」誌は、創刊六〇周年を機会

も多いのだから、「エコノミス

まや日本の論調を読む外国人

字になって来て機運が盛り上

かり、井上靖会長、巌谷大四

えて淅(ようや)く財政も黒

像」の三つが文学部会テーマ

おける日本文学」「文学と映

「作家と人権」「現代世界に

慮されるのではないかという 衝撃度の多寡という点も若

意見も飛びだしたりした。

叩き台を提出へ

べきだということになった。 は、われわれの問題が優先す 結局、日本で開催する以上

として分科会で論議されるこ

ところで、右のメインテー

がベネズエラのカラカスで明

米る九月には今年度の大会

していたのだ。会優も近年増

られなかったので、返事を遡 財政であり、会員の合意が得

望が出ているとはいいがたい。

どこへ行くのか、明確な未来展 か多すぎて、これからの日本が ささか難解かつ抽象的な論淵

なお、右の臨時増刊は、全調

のだが、四、五年前まで赤字

ばしば開催を要望されていた

ロンドンの本部からは、し

楽しなければならなかったが

員に耳馴れないことがかえっ 訳の問題もある。英點圈の会

て効果がある場合もあるし、

の方が重大だという情報も勘 核の問題よりも、飢えと貧困

待がかかっている。 十二カ国八十三センターの期

深

興味深い斬新な発想

本」である。

東光瞬の総合司会による多元計

この脳時増刊のメインは、伊

は、現状打破的な役割を果たせ

刊「どこへ行く これからの日 ト」創刊六〇周年記念の臨時増 げているのが、「エコノミス か。この課題を正面からとりあ しれからの日本はどうなるの たが、これまではともかく、 "これからの日本 について多元討論

で長く現状を維持している。む は、政治的には保守体制のもと しているがゆえに、国際的に しろ、そのように関内的に安定 斬新な発

のかもしれない。

とする政治状況への自覚問う

出してほしいと思う。

佐藤 多持・画

過程に参加していく」大衆か

は、従来の保革の対立軸のみな 佐藤のいう「構造的変化」

論』は中曽根政治を特集し、佐

ちの議論ばかりではなく、もっ 「国際的にも通用する論別を提

に、往々にして見られる仲間う

参議院選を迎えて、「中央公

状況を無党派層は打ち吸れる

者の曽根泰教「』退屈な政治に

日本政治論では、若手政治 意識や関心を分析

党派層の政治

なのである」と語っている。

口にやはり私は共感する。それ

似々な。世代的断絶があるだろ

るを得なかったためだろうか、 の諸君と真っ正面から対決せざ は私自身、大学紛争時に全共闘

それとも粕谷の年代により近い

もとより、こうした著者にも

派層」の政治意識や関心を分析 日号)が「若者文化」や「無党 か」(朝日ジャーナル・六月三

曽根政権が、果たしてそのよう 自民党政権」を書いている。

元総理が大衆の代表者として総 ら成る「高度大衆社会」が今日 西部はさらに、「むしろ田中 現在生じつつある」だけに、中 はいない」といい、しかし、 も国内的にも印象づけた政治家 佐藤は、「中曽根康弘ほど強烈 「日本の政治に構造的な変化が 一部が参照論文「岐路にた 鮮明にその新しさを国際的に

と支持者層の流動化であり、こ と指摘する。一つの有力な見方 権終焉の可能性を確めている」 回帰」は逆説的に自民党単独政 うした状況のなかでの「『保守 らず、日本社会の変貌を黙黙に した新しい政治的組織化の進展

雄弁に比して文章がやや生硬か だといえようが、佐藤の日頃の

な状況に自覚的であるかどうか

成っている。いずれも、気鋭の

レンマ」という三つの座談から 「二つの経済体制に共通するジ

西部の発言であった。

西部は、「十九世紀的な意味

理総裁の地位を握り、大衆の好

えて」、佐藤経明・喬木昌芸

の日本の姿だという。

・西部連「日本的大衆社会を超 技術の進歩を問う」、中岡哲郎 論で、西村肇・松下寛「科学と

つ立論も常識的でありすぎる

と思うのは私のみではあるま

悠をもって勝負を味わうことの できるかなり面白い

かーム

時代で選挙とはある意味で緊張 屈な時代でもある。その平和な していて興味深かった。曽根 は、「平和な時代とは別名、退

たが、これが決定するまで 文が示された。

解

国際ペン東京大会のテーマ駅文について

早 we write? を仮訳として nuclear age-Why do Literature in the 乙女 貢 tation of nuclear confron-

訳し方としても、原訳・意 論議が尽くされるのだが、 Literature and

スムーズにいくのではあるま nuclear syndrome

英訳が決まれば仏訳の方も

作家とペンクラブ活動で、と 能な現況である。 い)感を求めるなどとは不可 ても湘南の海に爽快(そうか ともあれ、かような次第で (作家・日本ペンクラブ常

シドニー・ノーラン氏の個展が 世代だからだろうか。 オーストラリアの代表的画家 オーストラリアの画家 (東外大教授·国際関係論 ーラン氏が個展

の肉体を支えるのだ」という昭

て、言葉と観念と目的が、人間 ろう。肉体が基礎なのではなく な表情を回復することはないだ 建なくして、現代人は真に快活 の特類のなかでは、「思想の再 に発育させているけれども、こ を特拠し、いわゆる全共闘世代 「全共闘・団塊の世代を問う」 う。今月の「現代の理論」は、

画館で開かれている。(七月三 東京・銀座の東京セントラル絵

日まで)

世代と三〇年代」の静かな語り

は左の訳文を叩き台に提出す るつもりでいる。

和一ケタ世代の粕谷一希「戦後

Literature in a nuclear

員の意見から、さまざまな訳 ないという福田陸太郎国際後 言葉がどうも馴染(なじ)ま

Literature in a world

tension

of nuclear

lile

Literature in

を聞いたが、五日の合同委で